KSKQ
第三種郵便物認可KSKQ（サロン・あべの）通巻879号1994年 8月20日

サロン・あべの

出会い ふれあい 助け合い

NO. 98

祝 100回目の「出会い」

サロン・あべの7月の出会い

94年7月16日（土）、育徳コミュニティセンター研修室において、サロン・あべのの7月の出会いを開催した。

記念すべき百回目の出会いは、桃山学院大学社会学部助教授の北野誠一氏においでいただき、障害者基本法成立までの流れを中心に、障害者福祉について、お話しをしていただいた。

「障害者基本法」のあらまし

太平洋戦争敗戦後の復興期にあたる、50年代の障害者福祉は、傷痍軍人を中心としたものであった。また、障害者運動の面からは、育成会や肢体不自由児協会など、障害者の親がその中心であった。60年代に入ると、高度経済成長による豊かな財政と、親の会の運動から、施設福祉が推し進められた。しかし、それに対峙するように、青い芝の会が、この頃誕生している。70年代は、オイルショックを契機に日本型社会福祉論が台頭。安上がりな在宅福祉が中心となり、70年に制定された心身障害者対策基本法も、以後二十年間にわたり、絵に描いた餅になってしまった。そして、80年代。国際障害者年で、完全参加と平等ということが言われ始めた。また、この国障年という外圧のお陰で、所得保障などが前進したという面がある。同時に、障害者運動にも、国際交流が盛んになり、自立生活運動が各地に広がって行った。そして、90年代に入り、やっと障害者基本法が成立したのである。

ここで、ノーマライゼイション（統合）と、自立生活（利用者主導）という、二つの座標軸から、障害者福祉における、障害者の位置を見てみよう。

大きな施設や病院は、職員や医者といった専門家主導の上に、一般社会からも分離されている。作業所の場合、利用者主導ではあるが、障害者と健全者が分離

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

している。グループホームになると、統合は進むが、専門家によるプログラムがやはり必要である。そこで、今注目されているのが、自立生活とノーマライゼイションという両方の理念を併せ持つものとしての、自立生活センターである。

一方、大阪市も、「障害者支援に関する大阪市新長期計画」を、今年三月に出している。大阪市の場合は、統合教育に実績があるため、当事者の選択を尊重する内容になっており、この部分では、障害者基本法を超えている。

基本法にしても、新長期計画にしても、障害者自身が賢く利用し、また、要求を声に出していくことで、さらに内容が充実する可能性がある。障害者が、社会や行政に対して、働き掛けていくことが大切である。

参加者31名。司会、井上憲一。

（上平幸雄）

北野先生のお話を聞いて
福祉の計画づくりを考える

原田　仁

まちづくり計画の仕事に関わるなかで、たまたま縁あって地域福祉計画などという福祉に関係した仕事も多くなってきたが、結局やっている仕事は高齢者に関するものがほとんどで、障害者基本法もできたことを聞いた程度で失礼したままだった。今、日本は高齢化社会ブームである。それにすっかり踊らされていることに、今日のお話で改めて気がついた。

「社会福祉は経済社会によって規定されてきた」ということは、行政とともに仕事をしているものにとって、常日頃感じている福祉（特にブームである高齢者の）が政治の道具にされているということに、どうも結びついてしまう。高齢者福祉はどんどん進んでいても、未だ高齢者を対象者とするところからは抜けだせないでいるようだ。そうであるからこそ、どんどん量を増やすということができるのかとも思う。

障害者福祉の分野でも、遅かれ早かれ、老人保健福祉計画のような数値目標を掲げた計画がつくられるのだろうと思う。老人保健福祉計画の場合、計画の前提としてかなりきめ細かいニーズ調査が行われたことは（それがどの程度有効に活用されたかはともかくとしても）画期的だった。障害者の場合は、高齢者とくらべてもニーズがずっと多様で複雑なのだろうと思うと、老人保健福祉計画のようには簡単にいかないなという予感がする。

「大阪市の場合は、当事者が要望すれば何とかなる面が強い」ということだ。計画づくりでは優先順位をどうするかということを常にいわれるが、ニーズが複雑であるほど一概には決められなくて迷ってしまう。そんな時はついつい大きな声を頼りにしてしまうのであるが、声の大きさでだけで勝負をすると、障害者は高齢者に束になって来られるとかなわないし、ましてや企業の金をかけた大きなスピーカーの前には見る影もなくなるというジレンマがある。

「高齢化社会はほんとうは障害者社会だ」ということを、これからの切り札にしていきたいと思った。障害化社会ブームに終わらないよう注意しながら。

●高齢者と在宅介護 11

井元（いもと）　真澄（ますみ）

三、脳卒中による要介護高齢者への援助課題（4）

《研究の結果》

2．脳卒中による入退院から在宅への連携状況

ここでは、脳卒中を主原因として介護が必要になった九八名を対象に分析を行います。

①退院時の状況

脳卒中が原因で「入院したことがある」者は七七名で、七八・六％を占めています。

この七七名に、退院時に何か問題点はなかったかどうかを複数回答でたずねました。「特にない」は四九・四％で、それ以外の約半数の者は、何らかの問題を抱えながら退院していることになります。具体的には、「家庭で生活できるほど体力がついていなかった」一九・五％、「家庭で療養するための知識や技術がよくわからなかった」と「身の回りの世話や看護をしてくれる者が手薄だった」が各一六・九％、「継続して治療や訓練が受けられなかった」一三・〇％、「家のつくりが合わない」一一・七％、などがあげられています。

退院時に、地域の機関へ連絡や相談を行ったかどうかについては、「しなかった」者が約四分の三を占めています。不安をかかえながらも、地域機関との連携がないままに退院していく者が多いことがわかります。

連絡や相談を行った者は一八名おり、誰が相談しにいったかについては（複数回答）、「家族」が一五名、「本人」が四名となっています。「病院」と答えた者はゼロで、この調査からは、退院時に、病院より医療ソーシャルワーカーなどが各地域の機関に連絡をとっているというケースはみられなかったことになります。

連絡や相談をした地域機関については、市町村、福祉事務所、保健所などがあがっています。

②退院とリハビリテーション

入院経験者七七名のうち、七割が入院中にリハビリテーションをおこなっていたと答えています。

それでは、それらの人々が退院後もリハビリテーションを継続しているかどうかについては、「退院後、すぐに受けた」者は三八・九％、「退院後、しばらくしてから受けた」者が一四・八％、「受けていない」が四六・三％となっています。つまり、退院するにあたって、継続してリハビリテーションを受けている者は約四割で、受けていない者が半数近いという結果です。

退院後にリハビリテーションを「受けていない」者二五名にその理由を尋ねると、多い順に「訓練のできる病院まで通うのが不便だから」、「これ以上訓練を受けても効果が期待できないから」、「近くに訓練のできる病院・施設がないから」、「訓練を受けなくても生活に支障がないから」などの結果です。これより、リハビリテーションが必要ではあるが、訓練のできる病院・施設が身近な場所にないことが原因で受けていない場合が多いことが考えられます。

ウルトラマンゲーム

私が大学で担当している科目に、グループワークがある。グループをつかって、人間を援助する方法である。講義のなかでは、グループについての理論や概念などを説明するわけだが、それだけだとグループワークの面白さが伝わらないので、授業では、グループの面白さを体験できるゲームを実際に学生たちにやってもらうことにしている。

ゲームは、こちらが考えたときにはきっとすごく面白いだろうと予想していたのに、なんとなく盛り上がらないことがある。逆に、こんなものはきっと面白くないだろうなと考えていたのに、思いもかけず、学生たちの好評を得ることもある。ウルトラマンゲームは、そういう予想外の好評を得たゲームであった。

ウルトラマンゲームといっても、怪獣のマネをして、プロレスまがいのことをするわけではない。用意するのはウルトラマンの人形ひとつである。社会福祉学科の学生たちには女性が多いので、できるだけ可愛いウルトラマンの人形を私は用意している。

だいたい六、七人の人たちが、円の形になって座る。私は、合宿の機会などを利用して、たいていたたみの上に丸く座って、このゲームをするようにしている。

ゲームは、誰かひとりが、人形をもちながら、「では、ウルトラマンゲームをはじめます」と宣言して、次のような台詞（せりふ）を言う。「ウルトラマンは、怪獣を倒すだけでは社会は良くならないと考え、Ｊ大学の社会福祉学科に入学しました」。（Ｊ大学とは私と学生たちの学校である）。言い終わったら、人形を、他の人にポイッと投げる。人形を受けとった人は、その続きを考えて、少しだけ語る。たとえば「ウルトラマンは大学のなかに、ボランティア活動をしているグループはないかと探しました」と、一言いってから、また、人形をポイッと他の人に投げる。投げる相手は誰でもかまわない。順番などはない。

ルールは、これだけで、これを延々と二時間、三時間と続ける。ウルトラマンは、私たちの一つの空想のなかで学校を卒業あるいは中退し、働き、出会い、別れ、そして老いていく。時がたつうちに人形に、いや、架空の人物に愛着がわいてくる。丸く座った私たちは、万能の神や悪魔のように、ウルトラマンの運命と人生を決めていく。ある人は、彼に挫折を与えようとし、ある人は、その挫折から彼を救おうとする。それぞれが彼に与える苦悩や夢や希望は、私たちひとりひとりの個性や、これまでの人生をあまりにも象徴的に表現しているために、驚きや笑いが自然に次々と出てくるだろう。

二時間、三時間とやっていて、私たちが疲れ始めたら、ウルトラマンにも死期が近づいたということだ。ゲームのなかの架空の人物なのに、死を与えるのはなかなか辛い。しかし、誰かがそれをしなければならない。この人生が何であったのかを彼が納得して、死んでいってほしいという願いが、ゲームの終末をおおっていく。

昨夜、卒業生たちとの合宿で私たちがつくりあげたウルトラマンは、酒の力に負け、職も家族も社会の信頼も失い、ドン底まで落ちてしまうのだが、やがて酒を断ち、自ら福祉事業をおこしていく。しかし、そこで見えてきたのは、J大学の社会福祉学科に入学してくるまでに彼自身が殺してきた、多くの怪獣たちの遺族の貧苦であった。多くの怪獣を倒したあと、さらに社会を良くしたいと正義感に燃えて社会福祉を学びはじめた彼だったが、自分自身の大きな挫折体験をとおして、自らの過去の罪を見てしまうのである。

それ以後、彼の福祉事業は贖罪のための事業となるが、生活資金を提供しても、遺族の心の恨みと憎しみは消えない。その恨みと憎しみが、彼らの心を貧しくしているのに気づいたウルトラマンは、その恨みと憎しみを自分の身に受けることによって、スポンジのように彼らの心の毒を吸い取ることができると考えた。彼は遺族の罵倒の前に、老いと病に弱った自分の身を置くことが自分にとっての最後の福祉事業かもしれないと思い、それを実行し、死んでいった。

このゲームの不思議さは、ウルトラマンの人生は、たいてい苦悩と挫折に満ちたものになることである。彼は、直情的で、あまりにも自分に正直すぎる。最期は、孤独な死になることが多いが、ゲームに参加している人たちは彼にもっとも手痛い挫折を与えた人をも含めて全員が、彼の死にあっては、そばにいて慰めるような優しい気持ちになっていることである。彼はしばしばゲームに参加している誰よりも人間的に成長し、私たちの尊敬を集めて死んでいくのである。（知）

大募集

百人一語

出会い一〇〇回・サロン紙一〇〇号を記念して、サロンへ寄せて下さる皆様の想いや感想、出会い・ふれあいのひとことをお寄せください。暑いのに申しわけありません。

〆切は八月二十五日

掲載は十月号（本紙一〇〇号）

作る つくる 創る 13

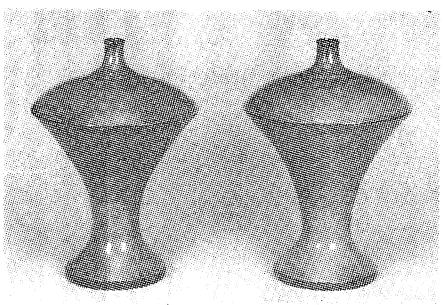
●河合惠子

赤い色について

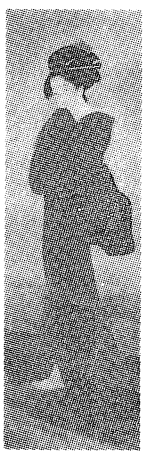
暑い夏が続いていますが、夏を色に例えるとやはり赤。そういえば青春、朱夏、白秋、玄冬という言葉がありましたっけ。赤といっても緋、朱、紅、丹など日本古来の呼び名も様々。昔はうすい色から濃い色まで、オレンジがかった色からピンクに近い色まで、幅広い色を赤とよんでいたとか。また、赤という字は「大」と「火」の組合せで、たくさん燃えると火が輝くことからその色を表すそうです。

今年、八月六日から九月十八日まで東京・目黒区美術館では「手と目の冒険広場、色の博物誌―赤―神秘の謎解き」と題した展覧会が開かれています。内容は第一部では赤色顔料の付いた貝殻、壺形土器、人物埴輪や棺といった考古資料や水引き、お守り袋、郷土玩具といった民俗資料や衣装、紅化粧、浮世絵などが紹介されています。そして第二部では「美術の中の赤―躍動するそのイメージをめぐって」をテーマとして上村松園、鏑木清方などの日本画をはじめ、岡本太郎、里見勝蔵などの洋画、浜口陽三の版画、大沢昌助ら現代美術の赤を基調とした作品が並んでいます。

ところで古来、人々はどんなものから、赤い色を作ってきたのかご存じですか？ 朱は水銀をとる辰砂という石からつくった色。朱肉や赤い漆、染色や日本画の絵の具など幅広く使われる古くからある大事な赤。ベンガラは赤土からつくった色で埴輪や土器に塗られたもっとも古い色。臙脂はインドの木につくラック虫のはきだす液からつくられ、丸い綿にしみこませて輸入された透明感のある紫がかった赤。紅は紅花からつくった赤で紅花は漢方薬として古くからつかわれ、江戸時代、ほうそうにかかると病人に赤いねまきを着せたり、壁に病除の赤い版画を貼ったそうです。



〈根来塗（ねごろぬり）瓶子一対〉室町時代



鏑木清方〈雪〉1940年頃 福富太郎コレクション

美智子のこんな話

岸田　美智子

施設障害者へのガイドヘルパー制度適用について

前回から掲載させていただいています施設障害者へのガイドヘルパー適用についての大阪府との話し合いが七月十八日にありました。

大阪府の解答は予想通り厳しいもので、適用は見送りとなり、あくまでも施設の措置費の増額を国に要求していくというものでした。

秋の補正予算でも取り上げてほしいとこちらから強く要求したのですが、補正予算で、対応できる問題ではないということで、これも難しいようでした。

大阪府独自の制度を創らねばならず、財政との絡みで実現がかなり難しいという状況で、またまた去年と同じように、来年度適用できるように努力するというものでした。

昨年はっきり、今年の春からは適用すると私達と約束しておきながら簡単にこの約束を破ってしまった大阪府の姿勢に対して、施設の障害者の方々の外へ出たいという思いをぶつけていきました。

今年こそは、財政当局を説得できる力を障害福祉課としていかにつくっていくのかということを追求していきました。

その後の話し合いにおいても、療護施設だけなら何とか実現してもよいが、と言ってきたりしているそうですが、施設のひどい生活状況は更生施設や授産施設でも変りなく、個人外出ができない状況はすべての入所施設に共通するせっぱつまった問題であり、ガイドヘルパーを適用するならば、全ての入所施設に適用してほしいと私たちは言い続けています。

ガイドヘルパー制度がもし適用されるならば、施設障害者の方々が寄われてきたいろいろな体験を取り返せたり、職員や家族とは別の人間関係を広げていくきっかけになったり、とても重要な自立生活を創り上げていく力になる突破口ができると思いますので、ぜひ実現していきたいものです。

この七月二八日にも、大阪府とのオールラウンド交渉があるので、その場でも粘り強く要求していきたいと思っています。

すくなくとも来年春から適用されればいいのですが…。

▦▦▦ 朗読テープのご案内 ▦▦▦

山本敏子さんのご協力で、サロン・あべの紙九七号の録音テープが出来ました。

バックナンバーは三九号から、九七号の分があります。五〇号は五周年記念紙になっており、九〇分と六〇分の二本のテープに収録されています。

又、絵本「未知の記憶」（作・絵＝中川勝彦）の朗読テープもあります。

いずれもご希望の方には、ダビングをしますので、冨田までお申し出下さい。

（☎〇六－六九一－一〇二八）

感謝します

カンパ、切手、ジュース、冊子、バザー用品々等、のご寄贈。

一筆箋、絵葉書等、お買い上げありがとうございました。お礼を申し上げます。

赤田寿子、赤松菊間、石田花子、
石田　律、伊勢村和子、大北清子、
大髙澄子、大塚一枝、岡本登志子、
笠原美和子、金岡千恵子、木寺ちよ子、
木村圭子、蔵田、阪口悦子、沢田妙子、
杉山鶯枝、秀　翠、大丸久美子、
竹中千代子、竹村定子、田中マサエ、
辻本輝子、津村和泉、津村けい子、
心の灯、冨田みきよ、永井美智子、
中岡久美子、中野君江、中村ヒサ子、
中原友喜、南光龍平、長谷川マキエ、
東谷和代、町野旬子、松田峰子、
松本克代、松森美智子、丸山寿美子、
山田絹代、倭　満也子、山根匡子、
吉原和郎、若林幸子、和田保子、
匿名二名　（敬称略）

○七月のカンパ　金三一、九二六円

おもろい　姉ちゃん

田渕　美登利

猛暑が仕事を奪う

「てんかん」という病気をご存じですか。

春から、やっと仕事が見つかり、毎日楽しそうに、そして一生懸命に職場実習に通っていたＴさんが、実習をやめました。

理由は、この猛暑が続く中、トラックで外をまわる彼女の仕事は、彼女のてんかん発作を誘発しやすくなるからだそうです。

まぶしい強い光りは、ある種のてんかん発作の誘発原因になるのです。

今夏のカンカン照りは、一人の女性から仕事を奪ってしまいました。

お知らせ

サロン・あべの九月の出会い

日　時　九月十七日（土）午後一時～四時

場　所　育徳コミュニティセンター二階、研修室（スロープ、トイレ有り）

阿倍野区阪南町五―十五―二十八）

パネラー　猿田　博　氏

（阿倍野区名所旧跡顕彰会会長

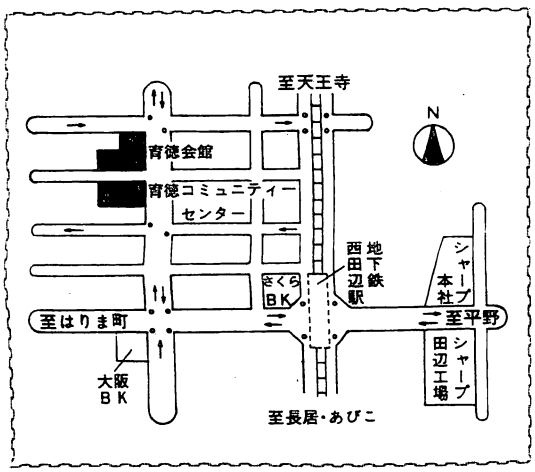
阿倍野区丸山地区民生委員会委員長）

テーマ　「阿倍野郷土史」

会　費　なし

お申し込み・お問い合わせ先

☎〇六―六九一―一〇二八（冨田慶子）



海外から

親愛なる慶子さんへ

あなたとあなたの支援グループが、思うだけでなく実行されることを望んでいます。

私は、まだ、あなたのメンバーの誰からも手紙をもらっていません。彼らに話していただけませんか。

私は、まだ、メンバーに書いて欲しいと思っています。

こちらの天候は、湿気が多く、寒くて、風が強いのです。変な天候なので、果物や野菜のできが、ひどくなっています。

私たちは、リスや鳥のほかに、庭にはいってくるシカを見るのが好きです。

あなたとペンパルからの手紙を待っています。

パティー・トラッキー

Dear Mrs Keiko

I hope this finds you and your support group doing as well as can be expected.

I still have not heard from any of your members would you please tell them I am still wanting to write to members.

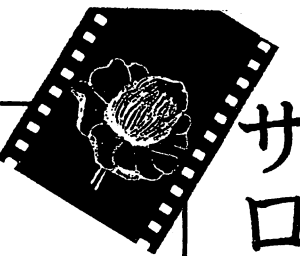
The weather here has been humid and cool, windy. I do not care for this as it affects our pain. The weather has been so strange that the fruits and vegetables have been awful! The tree's aren't producing much.

We like to watch the deer that come in our yard, along with chipmunks & birds.

I hope to hear from you and some pen pals.

Sincerely
Patty Truckey

サロンの絵葉書



好評の一筆箋に続いて、絵はがき二種類がサロングッズに加わりました。

四季の草花をやさしいタッチで描いている「花シリーズ」と、いつかはその街角にたたずんでみたい、そんな懐かしさを感じさせてくれる「街並みシリーズ」です。

その二種類とも、送り手の気持ちが素直に伝わり、字列が映えるデザインと抑えた色づかいが爽やかです。

「花シリーズ」「街並みシリーズ」ともに、五枚一組で一五〇円です。

サロン隣組ニュース

■「ウイズ・東淀川」誕生！

先月発足した「サロン・淀川」に続いて、＜サロン・あべの＞のようなグループが、７月１７日（日）東淀川にも出来ました。

その名も「ウイズ・東淀川」。

「ともに学び・ともに語り・ともに遊んでみませんか」を目的にして、年齢、性別障害など関係のない出会いの場を作り、そこからお互いに交流を深めて、ともに楽しめる地域社会を・・・との希いを持って。

第１回目の定例会は、地域のコミュニティー紙「ぽぷり」の編集長吉崎愛子氏をお迎えして、「ぽぷりと出会い」と題して地域の人たちとの様々な出会いについての、お話がありました。

○第２回「ウイズ・東淀川の出会い」

日時‥９月２５日（日）午後２時～４時

場所‥東淀川会館４階（エレベータ有り）

内容‥「ホスピスとは…
生と死を見つめて」

講師‥藤井理恵氏（淀川キリスト病院
伝導部　牧師）

問い合わせ先‥☎06-３４０-３０８２
（鈴木昭二）

○「サロン・淀川」８月の出会い

８月２１日（日）午後１時30分～４時

場所‥淀川区民センター

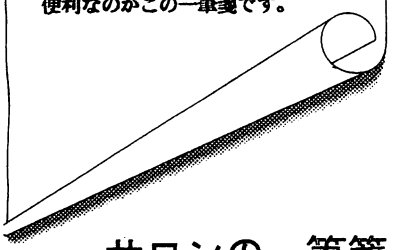
内容‥「インド文化」の紹介

講師‥Ｇ・ウペンター・レディ氏
（インド出身、淀川区在住）

問い合わせ先‥☎06-３０６-２９００
（淀川区社協）

これは便利。

贈り物をする時や、本や写真を
送る時などにひと言添えたい場合、
便利なのがこの一筆箋です。



サロンの一筆箋
1冊１００枚綴　１５０円

編集後記

この９８号がみなさんのお手もとに届くころ、わたしたち編集部の手もとには、１００号記念誌の特集＜百人一語＞のみなさんからの原稿がたくさん届いていることと思います。もし、お知り合いのなかで、まだ書いていない方がおられましたら、〆切の８月２５日まで十分間に合う旨、教えてあげてください。（石）

編集人；サロン・あべの運営委員会・＜サロン・あべの＞NO.98［'94. 8.20 発行］定価￥１００．
代　表；上平幸雄〒545 大阪市阿倍野区阪南町２－１９－２－３０３．　電話06-621-4365
連絡先；冨田慶子〒545 大阪市阿倍野区阪南町６－３－２６．電話０６－６９１－１０２８
表　題；斉藤孝文・筆
印　刷；セルフ社〒545 大阪市阿倍野区西田辺町２－２－１０－１０１．TEL.06-691-2365.

発行人；関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜２－１０－１３緑橋グリーンハイツ１Ｆ］

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）